2015 年度 A セメスター社会学理論

2015/11/13「社会という場の性質を考える　争い(3)」

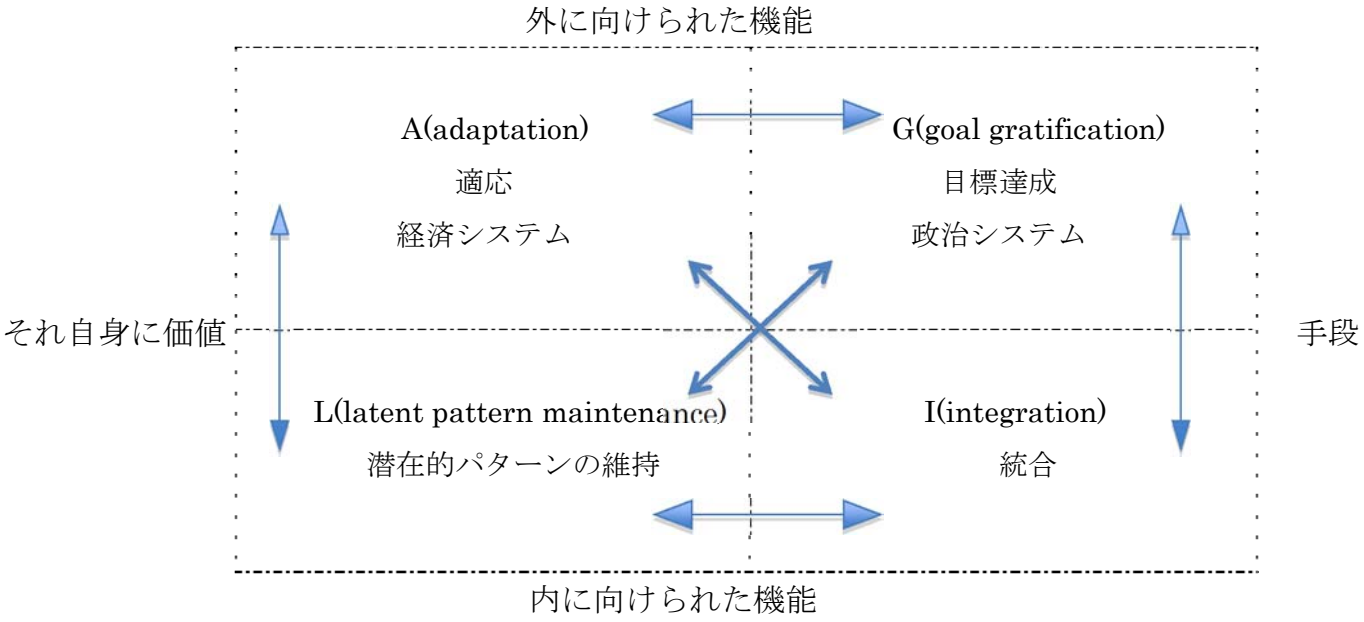
作成者：相関社会科学 3 年　土屋由里恵

Two competing major theories of sociology（社会についての二つの相容れない見立て）

Functionalism（機能主義）

1. Grand theory（巨大理論）　by T.Parsons

●パーソンズは、社会を統合され、安定しているものとみなして AGIL 図式で説明した



社会システムが統合、安定するためにはシステムとその外部環境との関係の調整が必要であり、そのために A と G の二つの機能的要件（functional prerequisite）がある。A はシステムが外部環境に適応し目標を達成するために必要な資本などを調達するもの、G はシステムが外部に働きかけてシステムの目標を達成するもの。また、システム内部を調整するために、L と I の機能的要件があり、L は成員相互の融合や緊張緩和をはかるもので、I は成員の秩序を実現するために役割分担などをする。社会は、AGIL という四つの下位体系から成り立っており、どこを切ってもこの図式が見られる。

●しかし葛藤理論側から、この AGIL 図式は予定調和的で社会を美化しているとの批判が出てくる。そこで、次にみるマートンが新たな定義を提唱。

2. Sociology of middle range　（中範囲の理論）by R.Marton

マートンはパーソンズのように社会を天国のような理想として見ることは無く、dysfunctions に注目し、機能分析を行った。

・順機能(eu-function)　ある社会現象が他の社会現象に対して果たしている機能のうち有利なもの

・逆機能(dys-function)　ある社会現象が他の社会現象に対して果たしている機能のうち不利なもの

・顕在的機能(manifest-function)　ある社会現象が果たしている機能のうち当事者に認知され公にも認められているもの

・潜在的機能(latent-function)　ある社会現象が果たしている機能のうち当事者に認知されない、もしくは公に認められていないもの

官僚制のねじれ

	顕在	潜在
順	○	×
逆	×	○

暴力団のねじれ

	顕在	潜在
順	×	○
逆	○	×

●官僚制が順機能的であるというのはどういうこと？

20 世紀経営学のサイモンから引用して説明。人間一人ひとりの合理性には限界がある（bounded rationality）ので、限られた対象について限られた側面からしか物事を捉えられない。それ以上のものに対処するためには組織によって境界（boundary）を乗り越える必要がある。マートン的には、組織においてはフィードバックによって内部調整がかかり逆機能が解消されるという。（でも、実際は調整されているのではなく、淘汰されているだけなのでは？）

●では、機能主義では変化は説明できないのか？

マートンの dysfunction ではなぜ変化が生じるかについては説明不足だったが、パーソンズの「青年期論」は社会的・歴史的に変化や葛藤を説明している。

1950、60 年代には青年期は crisis、逸脱期と見なされていたが、なぜこうした dysfunction が生じるのか。

パーソンズは、世代間の断絶を機能的要件（functional prerequisite）と見なし、変化の激しい近代社会において断絶は正当化される（必要不可欠）とした。

←学習は世代内では起こらない。それは世代間で起こる。いわゆる「世代理論」。

Conflict theory（葛藤理論）

社会は、権力による支配／被支配の関係から成り立っている。

「支配的なイデオロギーは支配階級のイデオロギーである」（マルクス）

支配的なイデオロギーによって多数派が形成され、少数派との葛藤関係が生じる。

Two competing major theories of sociology 再考

●「権力関係」について、葛藤理論と機能主義はそれぞれどう見ているか？

葛藤理論　社会には、権力を持つ者と持たざる者とがおり、社会の真ん中に権力が位置する。中心が常にひとつであるようなゼロサム社会で、一つの権力によって残りは周縁化される。

権力は必ず少数だが、周辺層を分断して味方につける。←分割統治の原則（devide and rule）

かくして権力は常に対抗勢力を周縁化するように努め、みずからの地位を維持しようとする。

被支配者は引き離され団結を阻まれている（ホワイトとミルク）。対立関係があいまい化され、誰が権力を握っているのか見えなくなっている。

機能主義　少数者（innovator）によって変化が社会にもたらされる（内部化）と、多数派と少数派との間に葛藤が生まれる。

多数派というのは環境の変化にも同一性を保とうとするような抗変化的存在で、「境界維持」の力を働かせる。

ヴェーバーが権力の定義で述べたように、多数派は少数派が望まないことをさせるだけの権能（権力）をもっている。しかしこの関係はイシューごとに変化し、ダイナミックに動く。

多数派と少数派の関係が逆転すると権力関係も逆転する。映画でもそのダイナミズムは観察された（自動車工、中国系）＝変化の要素が社会に浸透すると、少数者が多数者になっていく。

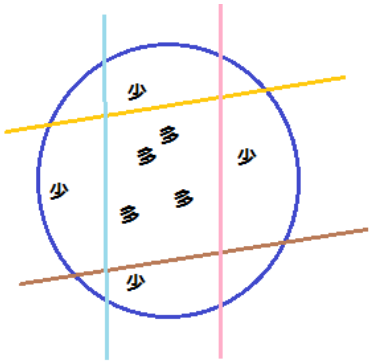
●葛藤理論と機能主義は全く異なる「社会の見立て」だが、(1) 社会の中には常に多数者と少数者の葛藤関係があること、(2) その力関係は流動的で変化するものであると主張する点では同じ。

違いは、変化がどこから来るか？の考え方にある。葛藤理論だと変化の要素は常に社会の中（支配と被支配の関係）にある。機能理論は、社会はそれじたいは予定調和的な全体（whole）だが、（自然や文化を含めた）環境の変化に適応しなければならない（機能要件）から、その変化を取り込み、社会の内部に葛藤が起こると見る。←この程度の違いなら相補的ではないかという気もしないではない！

●しかし機能主義には問題点が…

　社会には性的指向だけではなく、経済、教育、健康など様々なイシューがあり、イシューごとに価値剥奪される人が異なる。つまり、社会的資源（威信も含めて）を持つ者と持たざる者（強者と弱者、あるいは多数派と少数派）はいつも同じというわけでない。機能主義ならそう見るしかない。

しかし、実際の世の中はいかなるイシューであっても強者のままでいる人がいる。他方、二重三重に周縁化される人たちもいる。「弱り目にたたり目」「踏んだり蹴ったり」という言葉があるほど。



右の図で言うと、円の中の直線で囲まれたひし形の部分。直線はイシューごとに多数派と少数派が分かたれること（イシューごとに周縁化されるたちと、そうでない人たち）を示している。

直線によって分かたれる少数者はたしかにイシューによって異なる。しかし、どのようなイシューであっても周辺化されない人たちがいることが重要だ。

機能主義は、なぜどのようなイシューであっても周縁化されない人たち（グループ）がいるのかを説明できない。葛藤理論が「権力」と言っているのはこの人たち（グループ）のことであり、葛藤理論のモデルが優れているという結論に達してしまう。

←驚くべき結論なので、みな、自分の頭でよく考えてください！